

## 昭和の南海地震体験談

氏 名: 柏木 多美男(かしわぎ たみお)

生年月日: 昭和5年9月9日

地震を体験した場所: 田辺市

当時の家族状況: 父、兄、妹、叔母、叔父



### 1) 地震発生時の状況

当時 16 歳、兄と二人、自宅二階で寝ていた。父達は一階で寝ていた。

突然強い揺れを感じて飛び起き、逃げようと思い、一階に行こうと思ったが、降りるときに一階が潰れてはと、窓から逃げようとしたが、窓は開かず、揺れが収まるまで、布団を被って、階段で一階に降りて、庭先に出た。

表では、近所の大人たちが、「津波が来るかも知れない」と、自宅近くの名喜里川に、潮の動きを見に行った。

### 2) 津波襲来時の状況

子供の頃から、大地震の後に、津浪が来たという話(宝永、安政地震)は、聴かされて来たから、大きな地震の後に、津波が来るのは知っていた。

東光寺、大湊神社などにも潮位標があった。2年前の地震(東南海地震)の時も逃げた。この土地の人は<地震=津波>は、皆、知っていた。

父が「このくらいの地震では津波来るだろう」と、二ヶ月前に死んだ母の遺品を、私に預け、妹の手を引き、駅の上の「呼び上げ地蔵」(写真)標高12~13mまで避難する。

その後、山の上で、目の前に、船のマストを見て、「ここは危ない」と、更に奥の平草原まで避難する。



タイムロス有ったものの、父たちと同じ方向に逃げたのだが、私は、妹と先に逃げたから、たくさんの方が、呼び上げ地蔵に居たのと、その先の、奥の平草原に逃げたことで、父たちと、はぐれた。

夕方になって、家に向かって山を降りたとき、道で会った近所の人に、私の父親が、「子供と一緒に逃げなかったから、地震津波で子供を殺してしまったかも知れない」と嘆いて捜していたから、「早く家に行ってやれ」と言われて戻った。全員無事だった。

### 3) 家族の行動・被害

新庄村で9人亡くなって行方不明者が1人いた。

索道と言うのがあって龍神と新庄を結んで食料品や木材を運搬するためのロープウェイがあってその鉄塔へ避難する人もいたが、途中、自宅へ米を取りに戻る人がいて家の中で家捜ししていると、第2波の津波が来たため急いで避難するため鉄塔へ向かい鉄塔に登ったがその鉄塔も津波に押し倒され登っていた人が2人亡くなった。

本人の自宅近くに住んでいた子供4人は「お婆ちゃんの所に行きなさい」と母親に言われ1番上の姉がしたの兄弟を連れて避難場所へと向かう途中に7歳の子が「オシッコがしたい」と言いだしたので自宅へ戻りトイレを済ませて外に出た時、津波が接近してきた。その7歳の子は近くにいた職人さんが抱きかかえてくれたので無事だったがお姉ちゃん達3人は亡くなった。

### 4) 集落・周囲の被害



名喜里の惨状  
新庄公民館提供

道という道は、瓦礫や残骸だらけで(写真)、戻って家を見たら、一階は柱だけになっていた。近所も皆、同じ様なもの、一階の軒先まで津波は来ていた。

同じ町内で、9人が亡くなった。全体では23人、田辺市では69人の方が亡くなった。

その殆どは、この近畿で「舞鶴」と並ぶ、引き上げ援護局が、この湾にあった為で、他所から残務処理に来ていた職員やその家族(多分、津波の来襲を知らなかった人達の、ほとんどが一家全滅)、又、2年前の地震で、「野宿までしたのに来なかったから」や、津波が来ないので「無駄だった」と、一旦逃げていたのに家に戻った人、津波が来る前に、家に荷物をとりに戻った人達などが亡くなった。

### 5) 地震・津波後の生活

元々、被災した家は、父が仕事で来ていた住居兼・事務所で戦時中、港があり、海兵団があったから、終戦前に、何度か爆撃され、生活用品の最低限をこの家に置いて、あとの荷物は、実家に疎開させていた。津波後は、夜は実家で寝た。

片付けや、学校の野球部の練習があって、実家よりも、被災した家が、学校に近いので、1人残骸の家で寝ていたら、GHQに「衛生上悪い」と実家に帰らされた。

片付けは、学校から来てくれて、又、親類や近所からも助け合いの精神で、色んな団体から支援物資や援助があった。柱だけになった一階部分は、修理をして住んだ。

正月過ぎて、私は、野球部の練習があり、1人戻って自炊して、弁当を詰めて、学校に行っていた。近所の生活、様子も、皆、同じようなものだった。

被害が大きかったのと、引き揚げ援護局があったので、翌22年6月8日に、昭和天皇が巡幸で来て、被災地を見て回り、県知事や市長・町長、被災した人々に復興の励ましがあって、復旧や復興は早かったように思う。

家屋流出、家屋全壊の人は、海兵団の使っていた寮に住んだ。



呼び上げ地蔵に避難した人々  
(右端の背の高い男性の後姿は、私)  
新庄公民館提供

#### 6) 次の災害への備え

今、住んでいる家は、15~16年前に、地震津波の時より数m上げて、数十m山寄りに建てた。

後に、阪神大震災があつて、もっと他所へ行った方がよかつたかなと思っている。

防災教育として、小・中学校に、伝承に行っている。地域の防災としては津波対策に力を入れている。

子供達に、これまで、防災教育で学校に行つて、「逃げろ、山に逃げろ」と言つて来たが、自分の足で、山に登てみると、茨だらけで、道も悪く、ネットで塞がれているところもあつたので、あの頃とは、違うこと、「何でもかんでも山に行け！」などと言えないことがわかつて、避難道の整備などの必要が急がれている。

近くの高い所に避難すること、地震後の生活の工夫なども、子供達に伝えて、文化祭などでは公民館、漁業協同組合など協賛で大人たちが、“すいとん・やきいも”など、竈を使って炊き出しをして見せている。



文里避難タワー